

# Emergency Watch



## 神戸こども初期急病センター



2013年5月受診者数：3042人

### 訴え

- 1. 発熱 : 1805人 (1403人)
- 2. 咳 : 1386人 (344人)
- 3. 鼻汁 : 1081人 (19人)
- 4. 嘔吐 : 681人 (351人)
- 5. 下痢 : 516人 (96人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

### 疾患頻度

- 1. 急性上気道炎・咽頭炎 : 1089人
- 2. 感染性胃腸炎 : 641人
- 3. 気管支喘息・喘息性気管支炎 : 251人
- 4. 気管支炎・肺炎 : 158人
- 5. クループ : 110人

## 今月のワンポイント！

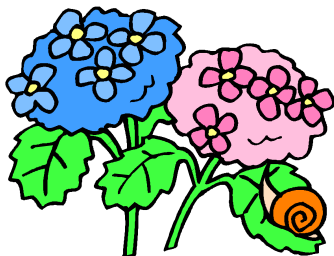
日差しも強く初夏を思わせる季節となりました。5月の神戸こども初期急病センターへの受診患者さんの数は、3042人と4月に比べ800人ほど増加していました。疾患別頻度は、4月と同様で、急性上気道炎・咽頭炎が最も多く、次いで感染性胃腸炎、気管支喘息・喘息様気管支炎の順でした。1～3月にかけて猛威をふるっていたインフルエンザですが、受診患者さんでインフルエンザ検査をした278人中、A型(+)は0人、B型(+)は65人でした。4月のA型(+)0人、B型(+)62人と比べ、横ばいでした。全国的にみても、この時期はB型が最も多く検出され、現在のところ減少傾向ですが、過去5年間の同時期と比較して多いようです。

今回は、例年夏場に流行が予想される「夏かぜ」について触れたいと思います。子どもを「夏かぜ」から守るためには、感染経路や症状を知り、早めに対処することが大切です。一般的に「夏かぜ」といわれる主な疾患は3種類で、かぜによく見られるせきや鼻汁の症状はあまり目立たないのが特徴です。

①ヘルパンギーナ：夏かぜの代表といわれ、食べ物をのみ込むのもつらいような激しいのどの痛みと発熱を伴います。のどの口蓋垂の周囲に、水泡性の発疹が現れます。水分がとれない、おしっこが少ないなどの脱水に注意し、発熱が2日以上続いたり、強い頭痛や吐き気などの症状があれば、医療機関を受診してください。くしゃみやせきなどが飛び散って感染するので、子どもにうがいや手洗いを徹底させてください。また、便を介しても感染するので、子どもの便を処理した場合は、特に念入りに手洗いをしましょう。

②手足口病：7月にピークを迎える感染症ですが、手のひらや足の裏、ひざ、ほおの内側などに赤い発疹が出ます。接触で感染します。保育園など集団活動の場で流行することが多く、熱は37度台ほどであり高くあがらないので、普段から子どもの体を良く観察するようにしましょう。

③咽頭結膜熱：7、8月が流行のピークで、プールでの子ども同士の体の接触や、タオルの共用を通じて感染するケースがあるため、「プール熱」の別名でも知られています。のどの痛みや目の充血、目やに、高熱などの症状が現れます。予防法は、流水とせっけんでの手洗いやうがい、人とのタオルの共用を避けることが有効です。



夏かぜは同じヘルパンギーナでも、原因ウイルスの型が多いので何度も病気になる可能性があります。夏バテで体力が落ちると病気にもかかりやすくなるので、子どもには規則正しい食事と十分な睡眠を取らせることが重要です。また、外出からの帰宅時や食事前のうがい、手洗いを、日ごろから習慣にしましょう。